

「今日の説教、聴き手のために」 2008/7/13 明治学院教会(121)

(このプリントは毎週作っているものです)

岩井健作

「隠された恵み」

ルカ13:18~21

1、このイエスの「パン種」の譬えは、優れた隠喩です。

第一に、隠喩はイメージを与え、経験と呼び覚まし、その物語へと引き入れます。ギリシャ神話の英雄アキレスは、不死身で足が速く、トロイア戦争で活躍をしたゆえに「アキレスはライオンである」と言われました。「ライオン」は隠喩です。私たちは、「パン種」の隠喩を通して豊かにされます。聞き手を隠喩理解可能の存在だと認めていることが「恵み」です。

2、第2に、このお話はパン焼きの技術の情報ではあるません。「情報言語」ではなく、象徴を与えている言葉「象徴言語」です。情報しか求めていない人は失望します。律法解釈の情報を求めた学者にはつまらない話です。その類いの人間は現代にも沢山います。

3、第3に、この譬えは「神の国」の譬えです。それは「イエスがアツバすなわち父とよばれた方との関係」そのものです。「神の国を何に例えようか」の主語はイエスです。日常のパン焼きの経験を選択したのはイエスです。日常の外に、宗教を求めよ、ではないのです。日常生活の象徴に「宗教性」は宿りのです。パンを焼くことは、神の国の象徴です。パウロが彼の書簡で「神を愛する者たち、つまりご計画の従って召された者たちには、万事が益となって共にはたらくことを私たちは知っています」(Ro8:28)と表現しましたが、「万事が益となる」という物語の世界へ、象徴が招くのです。

4、第4のこと。「パン種を・・・粉に混ぜる(mixed)」という表現の言語は(egkrupto)混ぜるよりは「隠す」という意味です。イエスの父の働き「神の国」は、隠された仕方でやってくるのです。パン種は入ってしまうと、入っているのかどうかわかりません。生地全体に浸透して、抑えることの出来ない発酵力になります。混ぜられて、隠された形で生きていて、力になっていくということです。

5、第5に。「やがて全体が膨れる」。神の国は定義ではありません。定義は変わらない。しかし、イエスの父なる神との交わりに、生きること、生かされることは、全体が膨れてゆくプロセス・過程を意味しています。イエスは神の国について「教えた」ではありません。「物語った」のです。私たちは、その物語の「聞き手」であり「担い手」であり「語り手」に組み入れられて行くのです。究極の目的に向かって歩みだすのです。

祈り、神よ、日常の些細のことに隠されている恵みを味わう喜びを与えてください。主の御名によって。アーメン